

# シナプス

第214号

明るく 優しく たくましく



学校法人 大東中央学園

大東中央  
幼稚園

大東中央幼稚園園長室だより  
平成26年7月16日発行

☆園長コラム ☆キンダーカウンセラーコラム  
☆担任の保育日誌から ☆身体測定結果

## 5歳児に何を教えるかだ

前号で『子ども・子育て支援法』人口減への対策も含まれているようですが、その最大の目的は『待機児童の解消』にあると言われていきます。現下の待機児童は、その殆どが0・1・2歳の乳幼児たちです。子どもたちの成長にとって最も大切なこの時期に『子育ての外注』を進めて、いったい日本の将来をどのように考えているのでしょうか。子どもたちの教育の柱は、家庭教育にあるとは謳っているものの、実態は『子育ての外注化促進』に他ならない制度に思えてなりません。子どもの最大の幸せは、特に0・1・2歳の乳幼児期に常に、お母さんの温もりを感じる距離感の範囲で生活する事にあるのではないのでしょうか。それを大人の都合で、日本経済の都合で、無理矢理引き離して生活させるのは、乳幼児にとっては、拷問・虐待に等しい事だと言っても、決して言いすぎではないと思われます。】と、子どもの幸せを視点に述べましたが、子どもの幸せとは、一言で言えば、将来それぞれの立場で社会に貢献できる大人に成長できる環境の下で生活する事だと言えましょう。その為に、親の責任・義務として、我が子の乳幼児期にはどのような教育・訓練・躾を与えるかが問題になります。

胎児期から母親の温もり（体温）を感じ、母親の鼓動を感じ、母親の慈愛溢れる声を聞きながら誕生を迎えた赤ちゃんは、いきなり外気にさらされ、自分で体温調節が出来ない・自分で食物をとれない・自分で歩けない・目が見えない等の極めて過酷な環境に入ります。そこで、赤ちゃんが最も安心できるのは、胎内環境とよく似た環境を作ってくれるお母さんに抱っこされて、お母さんの優しい声を聞きなが

ら温かいおっぱいをいただく環境でしょう。やがて視力がつくと、お母さんの目と目を合わせる事で、より大きな安心感をもらって、まさにこの時期に既に人間関係作りの基礎基本が育まれ、将来、だれもが持つ人への優しさ・動植物への優しさ・自然環境への優しさが体得され始めるのではないのでしょうか。その後、授乳や離乳食の提供・排泄の世話・体温調節の為に着替え・清潔を保つ為の入浴等々の世話をしてもらいながら、0・1・2歳期の乳幼児は、母親への絶対的な信頼感を体得します。この母親（人）への信頼感が、三歳以降の集団生活・社会生活を円滑に過ごす為の基礎基本になるわけですから、0・1・2歳期を母親と一緒に生活する事の重要性は、言わずもがなでありませんか。それなのに、我々の仲間であるはずの私学の幼稚園園長たち・短大の保育課教授が「そんな三歳児神話と言って、何にも根拠があらへん、古い考えや」とおっしゃる事実に、啞然とさせられています。

三歳児頃になると、それぞれに自我が芽生えて来て、何でも“自分で”という気持ちが台頭してくると同時に、同年齢の子たちと群れたい・群れ遊びをしたいと、ごく自然になってきます。心の中で、自分の立ち位置を見極めたいという事であり、まさに集団生活・社会生活に入る基本のところが出現してきます。だから“三歳になったら幼稚園”なのです。自我が芽生えたら、何でも“自分で”ですから、この時期は、教えるのではなく、多種多様な体験・経験の場を提供して、子どもたちが自ら学び取っていくための環境を提供する時期なんです。それも先生が子どもたちに何かを覚えてもらおうとする気持

前頁から⇒

ちがあれば、子どもたちは退いてしまいます。子どもたちは、何でも“自分で”ですから。幼稚園の先生は、さあみんなで遊びましょう・みんなで楽しみましょうといった気持ちで、多種多様な活動を提供するだけなんです。それが幼児期の教育方法なんです。先生が提供するものであって、決して子ども任せではなく・決して子どもの“自分で”を過信させ過ぎる様な自由のびのび保育が幼児教育ではないんです。「5歳児に何を教えるかだ」でもありません。

7月6日の読売新聞朝刊に『5歳児に何を教えるかだ』という見出しで、義務教育改革に関する記事がありました。【政府の教育再生実行会議が小学校入学前の5歳児の義務教育化を検討議題とする提言を出した。幼児教育充実を図るねらいだが、5歳の子に何を教えるのか、義務教育早期化の意義を明確にし、議論を深めたい。会議は、社会の変化に伴う今後の学制のあり方について検討して来た。=中略=中長期の課題として挙げられたのが、5歳児の義務教育化だ。全ての子どもに

質の高い幼児教育を保障する為、将来的に幼稚園や保育所の5歳児を義務教育にする検討を求めている。背景の一つには小学一年が学校生活に馴染めず、教室で騒ぎ回るなど授業が成り立たない「小一プロブレム」がある。幼児教育の指導体制を充実し、小学校との連携を求める声が強まっている。また保護者からは、幼稚園や保育所など施設による教育や指導の違いに不安があり、義務教育化によって就学前の教育格差が縮まる期待がある。=後略=】

本園が取り組んでいる総幼研教育“心地よいリズムとテンポの繰り返し”の活動を日々提供し続ける事で、子どもたちは“明るく・優しく・遅しく”育っていますから、本園卒園児たちには、今問題になっている「小一プロブレム」とは全く無縁です。

第一、目的も制度も違う幼稚園と保育所を一緒くたにして考える事自体が間違っています。今回の子ども子育て新制度における“幼稚園の保育所化”も、子どもたちのよりよい成長を追求する上では、将来的に大きな間違いになるのではないかと危惧しています。

辻本 博人